



韓国国立昌原大学から

樺田 榮一*

Key Words : From Changwon National University in Korea

1. 昌原のまち

昌原(チャンウォン)市は釜山(プサン)金海(キメ)国際空港のほぼ西約30kmのところにある、四方を山に囲まれ、西は馬山(マサン)市と、南は鎮海(チネ)市と境を接している。関西国際空港を午前10時発の日本航空JL967便に乗ると、約1時間10分で金海国際空港に着き、昌原のまちで昼食をすませた後、午後の仕事に充分間に合うほど、大阪からは近いところである。昌原市には、慶尚南道(キョンサンナムド)の道庁をはじめとして道教育庁、韓国放送公社(KBS)等がある。

このまちは約15年程前にオーストラリアの首都キャンベラをモデルとして計画され、開発された全くの人工のまちである。街の中には片側3～5車線の広い道路が縦横に走り、街の中心には半径約100mのロータリーがあり、その周りに市役所、韓国銀行等がある。街の中央を南北に走る道路の北端に道庁があり、南端には工業団地の東南管理工団がある。人工のまちであるので、官庁街、商業地域、工業地域、住宅

標題カット：昌原大学のシンボルマークで、中央の地球のまわりの鳳の尾は本を開いたところを表し、学問の意味であり、その外側をChangwonの頭文字Cで囲んである。なお、色はネービー・ブルーである。

* Eiichi KUNUGITA
1931年8月27日生
昭和29年大阪大学工学部応用化学科卒業
現在、大阪大学名誉教授、韓国国立昌原大学校工科大学客員教授、工学博士、化学工学
TEL 06-621-2507
FAX 06-621-6497



表1 昌原大学の構成

分 類		学科専攻数	各年度 学生定員
大 学	人 文 大 学	8	270
	社会科学大学	6	240
	経済経営大学	7	320
	自然科学大学	11	370
	工 科 大 学	11	540
	芸 術 大 学	3	100
	小 計	46	1840
大 学 院	修 士 課 程	23	301
	博 士 課 程	7	61
	小 計	30	362
経営行政大学院*	修 士 課 程	6	120
産 業 大 学 院*	修 士 課 程	7	180
教 育 大 学 院*	修 士 課 程	1	100
総 計		90	2602

* 社会人を対象として大学院で、講義は主として夜間に行なわれる。

地域等がはっきりと区画されている。

工業地域は市の南部にあり、そこには韓国重工業(ハングジュンゴンオブ)をはじめとして、現代(ヒュンデー)、大宇(デーウ)、LG(エル・ジー)、起亜(ギア)、三星(サムスング)、世一(セーイル)、雙龍(サンヨン)、暁星(ヒョソン)等の超一流企業グループのメンバー会社約400社の工場が工業団地(Industrial Complex)をつくっている。

2. 昌原大学校

昌原大学校のは発祥は、1969年に馬山市に設立された馬山教育短期大学であるといわれている。幾度かの改組の後、キャンパスが昌原市北部にある標高566.7mの鳳林山(ボンリムサ

ソ)の南側の麓に移され、昌原国立大学と改称されたのが1985年である。その後、1991年3月1日(韓国の年度は3月から翌年2月までである)に、4単科大学(日本での学部に対応する)からなる総合大学となってその名称が昌原国立大学校(韓国では総合大学を大学校と呼んでいる)となった。したがって、総合大学になってまだ5年の新しい大学である。総合大学になってからは、短期間にめざましい発展をとげ、現在では表1に示すように6大学及び大学院からなる総合大学となった。教官の定員は、総長1名、教授・副教授・助教授・専任講師(ほぼ勤続年数に応じて昇任するので定員数としては区別されていない)あわせて239名、助教(日本の教務職員に相当する)58名となっている。

工科大学についてみると、表2のように11学科からなり、学生定員は1年あたり540名である。機械、電気、電子、制御計測及び機械設計の5学科をメカトロニクス系と呼んでいるが、これが1994年に韓国政府から国策大学(重点大学)の指定を受けた。現在韓国全体で8工科大学が指定されている。それとともなって、昌原大学校にも5年間で約500億圓(ウォン)、日本円にして約63億圓の特別な予算が配分されることになった。この内約半分が韓国政府からの国家支援(補助金)であり、残りが企業、慶尚南道、昌原市からの対応資金(寄付金)である。これを契機として、21世紀の新しい大学づくりの計画が立てられ、その実現へ向けて動き出している。例えば、メカトロニクス系学生全員への奨学金の支給及び寄宿舎への入居、産学協同教育館(同時通訳設備があり400名を収容出来る国際会議場を含む)の建設、産業科学技術研究団地(土地・建物は大学が提供し設備は企業が負担して産学協同で研究を行なう場所)の造成等が進められている。これらの夢は1994年度から5箇年の計画であるので、ちょうど21世紀の始め西暦2000年の春に実現することになる。

3. 大阪大学との交流

1986年4月に、私の研究室へ韓国から一人の私費留学生がやってきた。金鍾和(キムジョ

表2 工科大学の学科構成

学 科 名	各年度学生定員
機 械 工 学 科	60
電 気 工 学 科	60
電 子 工 学 科	60
材 料 工 学 科	40
産 業 工 学 科	40
制御計測工学科	60
環 境 工 学 科	40
機械設計工学科	60
工 業 化 学 科	40
土 木 工 学 科	40
建 築 工 学 科	40
計	540

ンホァ)君である。彼は釜山にある東亜大学校の大学院碩士課程(日本の修士課程に相当する)を終了してただちに来日した。そして、研究生として1年間、大学院博士課程の学生として3年間大阪大学に在学し、「希薄資源からのリチウムの分離・回収に関する研究」で工学博士の学位を取得して帰国した。その後、彼は昌原大学校工科大学につとめるようになり、現在は同大学工業化学科の助教授になっている。彼は帰国後も廃棄物からのレアメタルの分離・回収についての研究を続けていたので、大阪大学基礎工学部化学工学科の教官数名と彼をはじめとする韓国の幾つかの大学の工業化学科、環境工学科の教官が研究グループをつくり、日・韓の協同研究を続けていた。さらに、1994年1月から1年間は金君が昌原大学校を休職にして大阪大学基礎工学部化学工学科の助手としてこの協同研究に参加してくれた。そして、1995年4月からは私が韓国でこの協同研究を続けることになり、昌原大学校に滞在していたところ、9月から客員教授を勤めることとなった。

丁度その頃、大阪大学基礎工学部と昌原大学校工科大学との間に部局間協定が締結された。これを機会に日本国際教育協会の短期留学生の募集に応募したところ、昌原大学校工科大学工

業化学科の学生1名が採用され、1996年2月
はじめから1年間大阪大学基礎工学部でお世話
になることになった。さらに、1996年度から始
まる大阪大学の短期留学プログラム(OUSSEP)
にも、昌原大学校が参加させてもらうことが出
来た。また、昨年(1995)の11月23日には、大阪大学
の国際交流委員長である松岡博副学長が昌原大
学校を訪問され、昌原大学校の李寿晤(リース
オ)総長、同工科大学の朴泰坤(パクテゴン)
学長等と、今後の大阪大学と昌原大学校との国
際交流の進め方について協議された。これに対
して、本年(1996)1月31日には昌原大学校の総長及
び工科大学長等が大阪大学を訪問した。当日は
午前中本部において金森順次郎総長と、現在の
部局間協定を大学間協定へと発展させることに
ついて協議され、午後は基礎工学部において畑

田耕一基礎工学部長と、基礎工学部の大学院重
点化に関連して、大学改革(いま韓国の大学で
も重要な課題になっている)を進めるにあたっ
ての諸問題についての意見が交換された。

このように、昌原大学校と大阪大学との国際
交流を極めて順調に進めることが出来たのは、
金鍾和博士のご尽力をはじめとして、昌原大学
校の国策大学事業団長尹英煥(ユンヨンホァン)
教授、学生處長崔平錫(チェポヨンソク)教授
ならびに大阪大学の留学生センター長大嶋泰治
教授、国際交流委員会委員駒澤勲教授、総務部
高林義憲国際交流課長、学生部永井俊夫留学生
課長等多くの方々のご協力によるところが極め
て大きい。改めて関係者各位に厚くお礼申し上
げる。

